

平成 26 年 12 月 5 日
企画渉外部・桃陰文化フォーラム事務局

第 3 1 回「桃陰文化フォーラム」報告

第 3 1 回「桃陰文化フォーラム」『邦楽サロン ～長唄を聴く会～』と題する演奏会が、11月15日（土）午前11時から多目的ホールで開催されました。当日は好天に恵まれ、生徒・保護者・卒業生・一般の方々約140名を前に、6名の先生方がすばらしい唄と三味線・笛の調べを届けて下さいました。



始めに唄のきねやかつし杵屋勝寿真先生（本名 森本加寿子。本校11期卒業生。）、三味線のまつながわ松永和三千保先生（本名 青山せつ子。本校20期卒業生。）、松永和三千ちほ絃先生、横笛の藤舎次朋先生による「都鳥」が演奏され、一気に江戸の雅やかな世界に引き込まれる感じがしました。周知の『伊勢物語』「東下り」にちなむ曲ですが、「河上遠く降る雨の、晴れて逢ふ夜を、待乳山、逢うて嬉しき…翼かはして濡る夜は、いつしか更けて…はやきぬぎぬの鐘の声。」と、都恋しさ、遠く離れた人への思いを、七五調の、ところどころ掛詞も交えた優雅な詞章で、江戸らしく男女の愛の交歓の世界に変えて謳っています。終曲後、杵屋勝寿真先生が長唄とはどういうものか、その歴史も含め分かりやすく解説して下さいました。

二曲目の「浦島」は松永和三うらしま絃野先生も加われ二人吟、二人三味線に笛という陣容で、「七変化」で知られる20分近くの曲ですが、前曲の「本調子」とは異なる「二上がり」や「三下がり」の調子が耳に新鮮で快く、春色みなぎる風景の描写の中に浦島伝説をからめて、おめでたい優美な気分が伝わってくる演奏でした。



あきのいろくさ

最後の「秋色種」では、新たに三味線の松永和三佳保先生も加わられました。杵屋勝寿真先生によると、「秋色種」は高雅・高尚な純粋な演奏曲として知られ、「踊りや芝居から独立した観賞用の長唄」だそうです。聞き所は二箇所にある三味線の二重奏（三人で弾かれています）。眼をつぶって聞いていると、予告通り「虫の合方」の「たのしき変態…」からの三味線の重奏は圧巻で、まさに聞き所、胸が熱くなるほどでした。さらに「琴の合方」の所も、三味線が「三下がり」で琴の音を擬し、艶美な江戸情調がみごとに現出していました。最後にお二人の吟で「常磐堅磐の松の色、いく十かへりの花にうたはん」と歌い収められたとき、六名の先生方の熱演に参加者から惜しみない拍手が送られ、その後参加生徒から花束が贈呈されました。



続いて質疑の時間が少し設定され、生徒や卒業生から「本番前の準備はどのようなものか。」「三味線の暗譜の要領は?」「古典芸能のよさを堪能した」などの質問・感想が出され、松永和三千保・杵屋勝寿真両先生が丁寧にお答えになりました。続いて校長のお礼の言葉に対し、「日本の伝統芸能を若い人々に伝えていきたいといつも思っているの、こういう機会を与えていただいて喜んでい

る。」との杵屋勝寿真先生の謝意のお言葉で12時20分に終演となりました。

先生方の思いは、国語科主催行事で毎年1月、1年生全員に大槻能楽堂での「能・狂言」観賞をさせ、2年生全員に一般の観客に交じって11月の文楽公演を見せている天王寺高校では今後もしっかり受け継いで行くつもりです。

杵屋勝寿真先生・松永和三千保先生、またご助演いただきました松永和三千紘・藤舎次朋・松永和三紘野・松永和三佳保各先生には、本当にありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。